

否定の前の肯定・山田順子と秋声

——近代女性文学と語る欲望(3)——

中川 成美

山田順子は一九三七年(昭和一二)二月二十五日付で自費出版した『神の火を盗んだ女』(紫書房)の跋にこんな一節を記している。

秋声先生から極限を尽した現実の具象化へのお誘ひと、その取り上げ方に緒^{オチ}ふ苦悩の重荷の仕末のつけ方を、即ち、課され求められた私は、……「肯定の前の否定」といふことを消化し切れない儘に胃の腑に、丸呑みに入れて頂いた儘で過してゐたのでした。

一九三五年(昭和一〇)七月号から『経済往来』(一〇月号からは誌名変更にもなつて『日本評論』誌上に連載された「仮装人物」はこの時に連載回数二〇回余りとなつて、丁度女主人公梢葉子が年下の大学生、園田と逗子で同棲するくだりが叙述されていた。順子に即して言えば、一九二七年(昭和二)四月二四日付『東京朝日新聞』に掲載された「飛び石のやうに……/男を渡

り歩く山田順子/突然、愛人秋声氏を裏切つて/若い慶大生と結婚」というスキヤンダル記事で世間の関心を集めていた時期に相当する。

ほぼ十年の歳月を経て再現される徳田秋声との交渉、若い学生との恋愛、それにとまなうジャーナリズムの攻撃をめぐる記憶は、順子が蒙つた精神的苦痛を今一度抉り出して追話させる役割を果たした。順子はこれを「肯定の前の否定」という言葉に収斂させている。この言葉は自己の発話が聞く耳も持たないままにすべからず否定されてしまうことへの抗議であり、肯定するかけらほどの意思も持たないままに予め無効化されてしまったことへの憤激である。そして、私の言葉を肯定・否定の判断の出発点に差し戻して欲しいというささやかな希求の意思がそこには籠められている。だが、彼女の生涯を通してついにそれは実現しなかった。

そのことは順子が一九五一年(昭和二六)一月に発表した「秋声と女弟子」(『中央公論』文芸特集号)に対する反応、例えば「真面目に取り上げるべき文章ではない」(広津和郎「断片」、『文

学界」一九五一・四)、「終戦後氾濫してゐる態の低劣な、ストリップ的読物」(徳田一穂「仮装人物」の手紙、「展望」一九五一・八)という評言からも明らかだが、それらの不当性について言及し順子の言説にスポットを当てようとした平野謙も結局のところ、「たいへんに奇怪な文章」(藤村と秋声)、岩波講座「文学」第四卷、一九五四・一)としている。順子が四半世紀を経て秋声との性交渉も含めた自らの恋愛を公表したという事実そのものを「奇怪」とする平野は、それが秋声の呪縛からの解放を望む順子が「仮装人物」のリアリティに拮抗するリアリティの創出を目論んだためだと推察する。だが、そうした捨て身の進撃こそが「すでにたたかわずして敗亡を予想した彼女の苦肉の戦術」(同)であり、結局「仮装人物」のはりめぐらされた文学的リアリティから、ついに一歩も出られ(同)ず、「闇での秋声」にその主題をひきしほらざるを得なかった(同)順子について「だれがやすやすアリバイなしのそんな事実を信ずるものかと、という一片の常識すら、彼女は見喪つてしまったものようである。」(同)と結論した。平野は順子の文章を「拙劣」、「文辞庸劣」と批判し、またその発表のあり方について「二個の犠牲者にほかならない」としながらも順子を「恥知らず」と断罪した。故に彼女の文章は「奇怪」なのである。それは書く動機への幾分の理解を示しながらも、男性との性的交渉を暴く「書く女性」への嫌悪を表明した表現であり、そうした女性たちの言説を(「敗北」の言語)に留めおこうとする男性の総意が言わず語らずの内に滲み出

てくるような、ある種の男同士の熟知り顔が仄見えている。

このミソジニーが強固なことは、順子の死後に現れた「仮装人物」論のなかにも探ることができる。野口富士男は「山田順子の『女弟子』は、ひとくちにいつて秋声に対するうらみつらみをめんめんと書き綴った一冊だが、ついにそれが告発の書になり得なかったのは、秋声自身すでに『仮装人物』のなかでおのれの愚かしさや非を包かくさず、(略)経済上の問題にも及んだ自己の狡猾さまであけすけにさらけ出してしまっているからである。」(「徳田秋声の文学」、筑摩書房、一九七九)と語り、松本徹は「大正から昭和にかけてジャーナリズムが生み出した実生活と係りのない軽薄な都市空間に、舞い漂ふ典型的な存在だった」(「徳田秋声」、笠間書院、一九八八)と順子を捉えたことから察せられる。しかしながらこれらの順子観は順子を批評の対象として浮かび上がらせる営為のなかから出現したものであることには敬意を表するべきであろう。問題は秋声論、「仮装人物」論のなかから急速に順子、および彼女が書き残したテキストそのものが消えていつていることにある。既に順子の評伝的事実は過去のジャーナリズムによって形成された「毒の花」(秋声)¹「単なる娼婦／路傍の土塊」(高畠素之)²、「迫害妄想の狂人」(竹田健吉)³、「多情多淫の美少婦」(杉山平助)⁴を一歩も出ることなく「仮装人物」によって固定され、その著作は稚拙、拙劣で読むに耐えない虚偽の言説とされ廃棄されてしまったかのようである。順子の言説はまさしく「(敗北)の言語」となつて、少なからぬテキストを残

しているにもかかわらずそれを読む必要すら認められなくなつてしまつたのだ。

山田順子はその生涯に本論末に「著作目録稿」として示したように再刊を含めて10冊以上の単行本と、雑誌や新聞に数十編の小説、エッセーを発表している。本論はそれらへの「再評価」を目的とするのではなく、ジェンターの力学によつて予め失われられてしまつた順子、および彼女のテクストを「肯定の前の否定」という根柢なき出発点から差し戻し、少なくともスタート地点に立たせ、「否定の前の肯定」へと再考する契機にしたいという、ささやかな試みにしか過ぎない。そのことが果たしてどのような私たちの立つ場所の不均衡を照らし出していくかということについて常に念頭から消し去りたくはないと思つている。『仮装人物』という極めて優れた近代小説を評価する行為と、そのことは決して背馳するものではないだろう。以下、順子の残したテクスト、および周辺資料を使い順子の側からの「順子の物語」を追うことによつて、この作家としてあり続けようとした一人の女性の尽きることのなかつた語る欲望と、その生産の情動^{アフェクツョン}について考えていきたい。

一 水辺に横たわる祖母

山田順子は一九〇一年（明治三四）六月二二日、秋田県由利郡本荘町古雪町五二番地に父山田耕作、母サトの長女として誕生し

た。⁵ 本名は山田ユキ、郷里ではおゆきさんと呼ばれていた。「順子」はその「ゆき」という音を漢字に当てたものと思われるが、いつごろから使用したのかは定かでない。これが「流るるま、に」（聚芳閣・一九二五）発表の際に筆名として用いられ、音も一般的な「じゅんこ」と呼称されるようになったらしい。後に勝本清一郎と同棲した時には「勝本ユキ子」と自称し、勝本も「ユキさん」と呼んでいたのが順子の当時のエッセーからも窺える。父耕作（旧名源次郎）は一八六八年（慶應三）十一月四日の生まれで、母サト（一七七四年・明治七年一月二日生）の入り婚であつた。祖父母である山田耕作（一八三五年・天保六年八月二六日生、旧名嘉左エ門）、ヨ子（一八四一年・天保十二年三月一三日生）は維新前までは六郷家二万石の本荘藩に仕える士族の出身であつたが、明治期の炭の商いから成功し、金貸しもしていたようである。その後サトに源次郎を迎え耕作の名跡を継がせてヨ子とともに回船業に転身し古雪町に居を構えたのは一八八七年（明治二〇）以降と思われる。

古雪港は子吉川河口に一六世紀終わり頃から発達し、藩政期には米、木材の積み出し、また塩、砂糖、日用品の集荷港として賑わい、西は大阪、姫路、堺、北は松前とも交易があつた。一八七九年（明治一二）三菱汽船の蒸気船が寄港するようになり、取扱高は年々増加して一九〇六年（明治三九）には出荷六四万八千七〇〇円、入荷二万七千八四二円となり、一九一二（大正元）には遂に出荷百二万三千二〇五円、入荷九四万五千八八二円に達し

た。順子はこの全盛期の古雪町でその幼少期、思春期をおくったことになる。こうした港町にはまた花柳界が発達し、本荘の文化人で俳人の長谷川百歌氏は「とにかく古雪といえは、花街を連想されるが、それだけ古雪港の華やかな時代は、酒樓と妓樓が軒をつらね絃歌さんぞめいていたのである。」〔古雪物語〕、「野」第十五号・一九八〇・六」と往時を回想している。この古雪が凋落するのは一九二四年（大正一三）に羽越線が開通した時からである。

厳格で武士風な躰を心掛けた家庭から一步踏み出すと、そうした色街の風俗を日常的に見聞する位置に順子はあつた。上京後の彼女の身づくろいを写真で見ると一種独特の着こなしをしているのもこの環境が自然に教えたものではないだろうか。吉屋信子は「美人伝の一人」〔小説新潮〕、一九六二・一）で秋聲夫人はまの「埋骨式」〔四十九日忌の間違ひと思われる〕で見た順子を「楠木清方の名作となつた『築地明石町』の明治の美女の立姿にどこか彷彿としていた」と叙し、また川崎長太郎は「ある女流作家の一生」〔新潮〕一九六三・二）で同日の印象を「喪服を上手に着こなした立ち姿は遠めにもいつそなまめかしいやうであつた。（中略）遠く近く彼女を散見する私は、ややもすれば幻惑され、射すくめられるやうな勝手を抱きがちであつた。」とその伸びやかな四肢から醸し出される艶やかな魅力を語っている。この両者とも実はこの回想で晩年の落魄した姿を描出し、完膚なきまで彼女の薄っぺらい内容を嘔っているのだが、その往時の秋聲描く「天性

の媚態」〔仮装人物〕をともなつた美貌に魅せられたことを語っている。

父耕作は養子ということもあり家業の発展に尽くした。家付き娘としてわがままに育つた母との夫婦仲にまで絶えず氣を配つたのは祖母である。「流るるま、に」から後の「愛と受苦」に至るまで、順子はこの氣丈で美貌の祖母を慕っていたのを繰り返して語っているが、この祖母が子吉川に原因不明の投身自殺をしたことは、順子の精神状況に多大な影響を与えた。「苦惱を招くもの」にはその祖母について「美しい祖母の全気体は、同性愛、否、心の同質愛めかしい、つながりと、憧憬でどの位、私の心の成長の上の、深呼吸をさせてくれたでせう」と叙している。その祖母が死んだのは七歳の時、一九〇八年（明治四二）八月と推定される。残された祖父も二年後の一九一〇年（明治四三）八月に逝去した。

本荘尋常高等小学校を卒業後、順子は高等科に一年在籍して秋田県立秋田高等女学校（現秋田北高校）に入学した。郡部の小学校の学力は都市部に比べて劣るため、高等科で受験準備をするという処置は普通であつた。「十四の春、そして家を、汽車も無いときの十三里も離れた、A市の女学校の寄宿舎にと、入舎させられた」〔苦惱も招くもの〕とあり、休みの帰省は馬車に乗つた。秋田北高校に保管されている学籍簿によると、入学は一九一五年（大正四）四月五日、入学試験席次は九十五人中七十五番であつたが、一年次では九二名中二四位、二年次は八七名中三一位、三年次は七八名中二〇位、卒業年の四年次では七九名中一八位の成

績を修めている。一年次は体も小さく体質が「弱」と記されているが二年次より丈夫になっていったようである。この当時の資料簿には容姿の欄があり一、二年次までは「普通」であったのが、三年次から「整」となっている。十五才ごろから容貌が整ってきたものと思われる。性格欄は「温和」、二年次にはこれに「世才ニ長ケタリ」の書き込みがあるが、この資料からはごく普通の女学生の姿が浮かび上がっている。順子には「白痴美」という風評のちに付き纏うが、学業成績は優秀であった。

ただ四年次の備考欄に「神経脆弱ニテ第二学期ノ大半ヲ休ム」という記述がある点である。これが「仮装人物」に語られる女学生時代の醜聞期に措定するのが一般的な解釈であろう。しかし「仮装人物」九節で語られる「学生同志の同性愛問題」によると、三年次に上級生と文通した、いわゆるエスを指すものと思われる。これは寄宿舎内の人間関係を巻き込んで発展していったものと思われるが、順子の女学校時代の同窓生菅谷たか氏から聞き書きを採った中村秀子氏がそれは大したことでなく、むしろ次の事件が重要であると指摘している。秋田の花街川端二丁目に美しい半玉がいた。順子はその妓にお熱をあげてしまった。自分も同じように鬢をふくらませた髪を結び、ピラピラ簪を挿して大森写真館で二人並んで写真をとった。それがショーウィンドーに飾られたのでことは大きくなった。もし、停学処分のようなことがあったとすれば、四年次のこの時期しかないが、学籍簿上では二、三学期の成績も出ており問題なく一九一九年(大正八)三月に卒業し

ている。

この「神経衰弱」による長期欠席の原因として考えられるのは内的な葛藤である。姑息で小市民的な教師や、幼稚な同級生への反撥と軽蔑、「誰も私と遊んでくれ」(「苦悩を招くもの」)ず、「沈黙する事を、孤独である事を、読書する事を、木陰に心静かに想ふ事を、美しい色彩に包まれる事を、そこでは詩的人物として全て蔑しめられ閉ざれてゐた」(同前)という知的な充足を得られない環境、封建的な地方旧家の女性規範は年を追うごとに順子の悩みを深くした。「苦悩を招くもの」に描かれるその時期の順子は「色と、過激な労働と、子を生む役目だけの生殖器か!」いづれも男が構成する各面への、各々をとりまく奉仕であり、勝手に相手の厭な時は男に取捨されて、何の抗議も申込めない、頼りなさにある事に変りはない……これは奴隷だ。「小さいときから教へこむ女らしさ」を正しく生かして生かされるといふのだ? 激しく怒りに燃ゆる疑問と抗議が私に、不当にとり扱はれる者の、鬱積した情熱を、駆り立て、考へさせるのでした」と鬱屈した怒りを胸に抱く女学生となって描出されている。帰省の度に土地の文学青年との交際が交わされるようになり、遠縁にあたる詩人小島彼誰(「仮装人物」の島野黄昏)の影響もあり、短歌などを作り始めていたが、本荘中学の年下の文学少年たち、武田勝郎、牧野新一郎らとの交渉がはじまり、「ひどいわ」という機関誌を出していた(木村与之助氏「山田順子」「あきた8」)。恵まれた家庭に育ち、地方都市にあっては最高の教育を受ける順子は、その

双方への不満でじりじりとしていた。ジェンダー規範の重圧に押しつぶされそうになりながら懸命に自己模索を重ねる少女像が一九三四年（昭和九）から回想されている。

この時期、順子は西銀座でバーJUNKOを経営していたが、思わしくない営業状態に呻吟する毎日だった。この自己把握のあり方は、二〇年近くの時間の経過の中で内省的に獲得されたものであったのは確かであるが、生活の苦勞のない華やかな娘時代の回顧という手法もある筈なのに、敢えて自己存在の主張に収斂させたことは注目に値しよう。そして、その懊悩は「死に吞まれてあるよう」な眩惑のなかで川に身を投げかけようとする誘惑にかられる。寸でるところで漁師に抱きとめられるが、幼時における美貌の祖母の自殺と相関した死への誘惑というモチーフは、殊更な感傷癖へと自己を追い詰める順子の重要な素材の一つとなった。「流るるまゝに」には女主人公増田濛子が夫を逃れて郷里・秋田に家出する途上での車中で「今し、悩ましい夕暮の恍惚さに誘ひ出されて、それ等不滅の靈魂が、流れゆく河水に、死の魅惑を込めて、自分をもまねき寄せやうとしてゐるのではあるまいかしら」と想像に耽る場面が登場する。原体験としての死は「ほんたうにそれは、美そのものと云つてよかつた」という甘美なものの表象ともなつて濛子の美への憧憬をかき立ててやまないのだ。それは濛子の芸術への飽くなき探求を駆り立てるものと同じものだ。「彼女をして、家庭にとゞまらせやうとしない或る力が不斷に彼女の女の中には動いてゐた。」として、この祖母への追慕が家出と

深く関わっていることを小説は告げている。「仮装人物」ですげなく「家庭に対する反逆気分」（「仮装人物」一節）とかわされてしまつた「流るるまゝに」は確かに「格にはまらない文章も文字も粗雑」（同）な作品ではあるが、背景に湛えられているのは虚無には至らずに放置された不可思議な生への飢渴感の所在を探ろうともかく激情的な心理の葛藤が豊み込まれていたのである。

二 結婚という枷

一九一九年（大正八）三月に女学校を卒業した順子は古雪に帰郷して稽古事などに日を過ごしていたが、良家の「人目立つ方の娘」（「流るるまゝに」）にはすぐに多くの縁談が起こつた。だが、「文学や絵を愛好する、幽遠な憧憬を抱いてる濛子にとつては、姑小姑の多い、何がための利欲を肥やすのか解らないやうな、どんなよりした家庭に嫁して、一生を金のお守りだけに暮す、中学切り程度の男を、夫として嫁づく妻なんぞでは、どうして／＼満足されやうはづも無かつた」（同）順子は何度かの見合いを繰り返しながらも「相手を馬鹿にした風」（同）を拭い去ることはできなかった。「理想が高い」（同）と親戚や近隣の人々から非難されたが、そうした中で従兄から「係累の無い独り身である事―財産が無くとも帝大出だ」（同）という理由で紹介された彼の幼なじみ、由利郡亀田町出身の増川才吉と一九一九年（大正八）暮れに見合いをした。

士族の家に初めての男子として出生した増川は慈しみをもって養育されたが、八歳の時に父を失い、その後頼みとした長女の夫に財産をだましとられて才吉母子は窮乏していった。幸いに北海道の叔母（父の妹）のもとに養女となった三姉が上級学校への進学費用を用立ててくれ、才吉は中学校、第二高等学校、そして東京帝大独法科を終えることができた。三井売炭所に就職した才吉は小樽に母を伴って赴任したが、母の死、それに続く恩ある三姉の突然の死によって淋しい境涯になっていたが、その骨を納める為に帰郷する機会を利用して順子と見合いを交わしたのである。そして二人は「最初、恋から成り立つた婚約者のやうに」（同）結婚を決意し、父や兄たち周囲の暖かい援助のもとに翌一九二〇年（大正九）五月に山田家で盛大な式を挙げた。才吉二八歳、順子一九歳であった。

順子夫婦は山田家の女中であつた中村ナツノを伴つて小樽に新居を営むが、才吉の四姉とその娘・京極京子（「流るるま、に」泉子のモデル）が家事手伝いの名目で滞在しており、気遣いは著しかった。また才吉の借金が積もつていて僅か五ヵ月余りの間に、順子は実家で用意した嫁入りの品々を失つてしまつた。順子は妊娠したのを機に、実家に戻つた。送り届けるために同道した才吉は職を投げ打つて本荘に間借りをし、弁護士資格をとるべく猛烈勉強を開始した。一九二一年（大正一〇）三月に長女淑子を無事に出産するが、「乳腺炎」（「苦悩を招くもの」）にかかり大手術を受ける。順子のはちに小樽に帰り二度目の手術を受けるが、これに

よつて乳房を失つた。吉屋信子はヨーロッパ探訪から帰国した祝いというこゝで秋声から料亭への招待を受けた思い出を前出の「美人伝の一人」に書いている。その記憶が正しいとすれば一九二九年（昭和四）九月頃のこととなるが、勝本清一郎と別れ、再び秋声の元に戻つた順子と共に入浴した吉屋は次のように順子の身体を語る。

彼女の裸身は肌白く美しい姿態だったが胸の乳房は片方一つだけで、残る一つはメスでえぐり取られた乳房の傷跡を無残に示していた。「乳瘤だつたの……」彼女は羞かしげに濡れ手拭でそこを覆うた。私は見てしまつて悪いことをしたと思つた。

つまり順子は二〇歳そこそこで両乳房に障害をもつことになり、その病因については「流るるま、に」、「苦悩を招くもの」双方で「乳腺炎」としている。しかし、このような大手術が単なる「乳腺炎」のためのものとも思はず若年性の癌の可能性も拭いきれない。順子はこの後に体調を崩し、リュウマチにも罹患したと「流るるま、に」の濺子を借りて書いている。順子はその姿が美しいことで人びとの関心を集めたが、健康状態としては常にどこかが不調であつた。「仮装人物」には執拗といつてよいほどに、葉子の持疾が言及されるが、庸三が葉子の要求で患部を見たり治療をする箇所は、性的窃視の欲望と病理的グロテスクへの嫌悪が

ない混ぜになった形で、独特のエロティックなシーンを構成している。

媚惑的なオブリジェとしてのなやかな身体は、実は波乱の錯綜を抱え持つ病める身体であるという不均衡を吉屋は一瞬のうちに決った訳だが、吉屋が眼を背けようとする順子の身体は多くの恋愛の処罰としてあるのではなく、それらの恋愛の出発点に既に用意されていたことを今一度問い直すべきであろう。性的身体として社会に認知された順子が、実は女性性から疎外された身体を抱え持つ両義性こそが、順子のセクシュアリティの根幹を形成している。順子への男性視線の暴力的介入は順子の身体を所有したいという欲望を惹起するが、彼女と性関係をもった男たちが手ひどく順子の病んだ身体を嘲笑し、忌避し、怖れた。秋声の痔疾を筆頭に、竹久夢二は『出帆』〔都新聞〕一九二七・五〇九で「三太郎の話を眼をうるませて聞いてみた甚子が、甚子の下腹部がごとんごとんと出発する機関車のやうに鳴りだした事だった。」と順子をモデルとする今田甚子が性的興奮に陥って知らずに滑稽な音を立てると描写したことや、或いは後年に勝本清一郎は『座談会 明治文学史』(岩波書店、一九六二)で、順子の肉体的な二つの弱点という言葉で彼女の身体について濁しながら触れた。一つはおそらくは乳房のことであろうが、もう一つは性的行為に関する問題であろう。ここで勝本はしきりに順子は「だれが見ても美人でもなんでもない人ですよ。」と主張するのだが、これが肉体的な「弱点」と結びついているのは明らかである。彼らは順

子の身体を拒否しながら、一方にそれを性的表象として思い返している。このアンビバレントな拘泥こそが順子という物語を創っていったのだ。

この病中に郷里の父は爾来わずらっていた肺結核のために世を去った。一九二一年(大正一〇)四月二十七日、享年五二歳であった。父の病気で店は休業状態にあり、跡取りである順子の兄耕一(一八九七年二月一日生)は東京で歯科医になるべく就学中であった。三か月ほどたつて兄が家督を相続したが、思ったより遺産が多く兄の采配で順子も多額の遺産分与を受けたが、増川が弁護士となつて小樽に開業してからは事件の依頼人の金を使い込んで再び多額の借金を抱えたために、順子はその遺産を使い果たしていった。母と相談の上離婚を考えるようになったが、兄が「破婚で家名を傷つけてくれるな」「苦惱を招くもの」と増川に金銭援助をした。その後も増川の投機熱は止まるところがなく何千円もの金を動かしながらより多額の借金を重ね、「花崗石の山」(苦惱を招くもの)に手を出して負債を負い刑事事件へと発展して、遂に順子の実家から見限られた。結婚四年目、一九二三年(大正一二)であるが、夫とも離婚が話題となつたものの次女淨子が生まれ順子も身動きがとれない状態となつてしまった。

一九二四年(大正一三)一月二三日付「小樽新聞」に「理解が築き上げた幸福の殿堂／純真の妻を得た増川弁護士」と題した記事が掲載されているが、順子の微笑む写真を添えて「弁護士法学者増川才吉氏夫妻！御身達こそ真面目な結婚者、幸福な結婚者、

そして忠実な結婚者だ」に始まる理想的カップルの賛美が気恥ずかしいほどに紹介されている。知的な相互に尊重しあう夫婦という基調をなすこの記事の目的は、明らかに記事とは不釣合いなほどに大きく映し出された順子の写真であろう。豊かな髪を夜会巻とも耳隠しともつかない独特の形に結び上げ、よろけ縞のコートの上に毛皮の襟巻きを巻いた順子の明るい笑顔は充分の商品価値を有している。「名流婦人」の肖像というよりは女優のプロマイドに近いポージングを順子は銜いもなく実行している。おそらく巨額な負債を抱えた才吉の起死回生をはかるべく宣伝媒体として地方マスコミに登場する必要があったのであろう。既に文芸講演会や展覧会に足繁く通う順子の容姿は地域では有名になっていたし、順子の当時の先端的な生活ぶりは人目を引くのに充分であった。順子はいよいよ自分自身の対価を求めて社会に漕ぎ出した。それは自立や解放という甘い名で誘い込んではいるが、実は間断なく男性視線がせめぎ合う女性市場というゲットーへの片道切符に鉄を入れてしまったことに順子は気づいていなかった。

三 「芸術」の高みに

順子の生活再建は、年来の願望であった作家活動に従事することであった。「生活の保証」そうした基礎を遠く離れて、芸術のためなら――全てを捨てられる、夫も子供も、何もかも犠牲にしてさへ悔いないまでの真剣さだった。「流るるま、に」と記す順

子に迷いはなかった。当初「水は溢るる」(「愛と受苦」の後書き)と題された小説は、小樽を離れて実家で書かれたらしいことが『流るるま、に』から窺える。この時順子は第三子暁児を妊娠中であつた。おそらくは短期間のうちに脱稿し、出版のために東京に向かうのは一九二四年(大正一三)三月であるが、この時に既に八か月の身重であつた。才吉と淑子がこれに付き添つたのは才吉が債権者から逃れるために淑子を連れて小樽から出奔してきたためと思われる。震災復興下の東京で宿屋住まいをしながら文学者、出版社を回つた。

一般に順子と秋聲の出会いには三木露風の紹介と言われているが、露風と順子を結ぶ縁は露風が一九二〇年(大正九)五月から二四年(大正一三)六月まで北海道トラピスト修道院の講師をしており、順子がそこを訪れたことから始まった可能性が高い。しかし『流るるま、に』の土岐善磨の跋文によると、朝日新聞社の同僚「O君」が増川の友人で、彼の紹介で作品を見たところ。しかし「僕の任」ではないと感じた土岐は秋声に紹介状を書いた。秋声宅には才吉同道で赴いているが、秋声は「反家庭的な或物のあるのに心着いて、聊か反感をもつたくらゐであつたので、躊躇なく棄却しよう」(『流るるま、に』序)としたとある。「白木蓮の咲く頃」(『改造』一九二七・二・三)には順子夫妻と淑子の幸福そうな美しい家族の像が描かれるが、それに対比して持参した小説の不幸な影が浮き上がっている。が、『流るるま、に』は未だ書かれていない小説を書き始めようとする話であつて、実際に

小説中には何の作品も書かれてはいないのである。小説を書くこととする意思是描かれるが、その小説はどこにも存在しないという「流るるまゝ、に」の不思議な構造は、以後の順子の行程を象徴するかのような。彼女が求めようとする「芸術」は理念化され、概念化され、少しの具体的な言説も紡ぎださなままに放置されている。そこには「芸術」を飽くまでも追求してやまない異様とも称する熱気のみが渦巻いている。順子はこの時約五百枚の原稿を書いたとされているが、私は「流るるまゝ、に」の物語内容を越えて次の物語が展開したとは思えない。もしそれだけの枚数が脱稿されていたとしても、おそらくは「流るるまゝ、に」と同様にこれから小説を書くこととする女性の話が同工異曲にぐるぐると回っていたのだと思う。つまり順子は高い「芸術」を獲得しようとして闘争する女性の物語を生涯書き続けたのである。では、その「芸術」とは何だったのか。「流るるまゝ、に」の終結は「芸術」に殉じようと決意した濛子が悲痛な叫びをあげながらすすり泣く場面まで終わっている。

——どうしたのだ！私の心よ、あの、熱い、激しい、全てを焼きつくさないではおかない焰の熱よ——お前はもう消えて了つたと云ふのか——私を——私を——此処迄あやつつて持つて来て置いて、今——此処で突き離して了ふとは、それはあんまりにひどい！あんまりにひどいと云ふものだ！あんなにも書き度かつた、強い激しい情熱は、狂はしさは、一体

——何処へ影をひそめて了つたと云ふのだ——えーさあ出て、出て、出ておくれ、そうしてもう一度、哀れな私の心を救つて奮い立たしてお呉れ。

彼女が真に「芸術」とする小説はもしかするとどこにも存在しないのかもしれない。それを異常な情熱で追い求めようとする執念に秋声は危険なものを感じた。たおやかな外見をことごとく裏切る野性的な激情への不可解な嫌悪こそは、女性を処罰へと向かわせる男性共同体の無言の怖れを誘発する。順子は格好の標的であることも知らないままに、どこにも存在しない「芸術」の高みに歩みを進めた。その意味で順子の残した著作は、永遠に真の「芸術」を獲得できないシジフォスの言葉となつて特異なテクストを形成したのである。それはまた「芸術」が男の言葉であつたことを思い出させてくれる。女性の語る欲望のみに支えられた順子のテクストへの評価は、そのままにその欲望を「肯定の前に否定」しようとする力の別の顔なのだ。

結局、出版の目途は立たず、家族はいったん小樽に帰つた。その後、順子は実家に帰り長男晁児を出産したが、その間に増川の事情は末期的な状態となり債鬼から逃れるため満州へ渡航しようとした。一通の離縁状が彼から届いたため順子の兄・耕一と妹・トミ（一九〇六年三月二三日生）の婚約者大森晃が探し回り、東京に潜伏している才吉を発見した。北海道の債権者が順子の本荘の家にまで取り立てに来るようになり、兄は完全に順子夫婦を見

限った。居づらくなつた順子は母の援助で子供と一緒に上京し才吉に合流したが、偽装離婚を薦める夫にしたがつて、受験準備に來ている弟良輔（一九〇四年二月八日生）の下宿に自分だけ移つた。一九二四年（大正一三）秋頃からと推定されるが順子は経済上の理由からも出版を望み、また自身の身の振り方についての相談を兼ねて秋声のもとに出入りするようになった。秋声は映画女優になるように助言、久米正雄を紹介した。久米に連れられて松竹蒲田を訪れた順子はすぐ研究生として採用されたが、それきり撮影所には行かなかつた。この件については夫も承知であつたが、いざ決まってみると「女優になるような根性の女は見込みが無い」（「苦惱を招くもの」と話されたのが原因である。カフエーの女給見習、電話交換手など話題を拾うためとしか思えない「職業遍歴」はいづれも短期にしか勤まらなかつた。だが、子供を才吉のもとに残しているため、生活費の工面はいやおうなく順子の肩のしかかつた。実家の母からの兄に隠れての援助だけでは方途が立たないのだが、順子はやはり文学で身を立てるといふ夢を捨て去ることはできなかつた。秋声から紹介を受けていた聚芳閣の足立欽一は自らも戯曲や小説を書く趣味人であり秋声に師事していたが、出版書肆として中西伊之助、邦枝完二、佐々木味津三などの小説、また映画・演劇関係の理論書などを出版していた。自身でも『迦留陀夷』などの小説がある。おそらくは一九二四年（大正一三）暮れごろまでに順子と足立の間に関係が生じ、出版が一気に現実化した。順子の子供はとどめておきたいという願いを無

視して才吉は小樽検事局の召還に応じるため、三人の子を連れて小樽に帰つたが、この時期には経済的な亀裂だけではなく、心理的にも二人は一緒に住むことが難しくなつていたと思われる。離婚は翌二五年（大正一四）二月に成立、三月二〇日発行で『流るるま、に』は出版された。当初、「水は溢るる」としていたのだが、足立のジャーナリスト的才覚が、のちの「和製ノラ」と評される世評が喚起されるのを当て込んでのタイトル変更であつた。順子は終生この題名を嫌つた。このことによつて彼女はジャーナリズムの生贄として存在そのものを否定される人生を歩むことになつたからである。言い換えれば秋声との関係が生じる以前に既に順子は通俗的道德によつて烙印を押されたスキャンダラス・ヒロインであつたのだ。

四 スキャンダラス・ヒロインの出発

才吉との離婚は、おそらくは足立との関係、また増川の裁判のこともあり断行されたと思われるが、順子の意識の中では真実の離別という感覚は薄かつたようで、それが後の子供の養育をめぐる紛争になつた。才吉は妻から捨てられ、三人の子供を男手で育てる哀れな境遇の元エリートとして小樽の人々から同情された。実際はナツノが育て、彼女はのちに才吉の妻となる。秋聲、菊池寛、土岐善麿らの序文、足立の跋、竹久夢二の装丁に彩られた『流るるま、に』の出版と同時に順子はジャーナリズムの好餌と

なった。最も早いものは一九二五年四月三日の「小樽新聞」で「家庭を離れて／＼芸術の世界へ／＼処女作「流る、ま、ま」を出した山田順子さん」の見出しとともに「夫から去り三人の愛児を捨て迄芸術の世界に自らを投げ出した元増川夫人山田順子さんの心情こそ又なく解し難い事であつた」として批判している。そして一年前と同じ写真を再掲しているのである。理想の先進的で聡明な女性像という役割を担った順子の笑顔は、いま奔放で身勝手な自己実現の欲望にとられる逸脱の女性像へと変換されたのだ。続いて同月二日『秋田魁新聞』は「北海道」の署名で「順子は虚栄の化身である。」と始まる順子非難・増川擁護の記事を掲載した。「貞操？彼女は小樽にゐた時分、ダンスホールに出入して、若いつばめをくわえ込んだり、男と旅に出たり、美しい蝶のやうなものであつた。」「増川君が事業に手を出したのも彼女の虚栄心に添ふ可く軍資金をこしらえるためであつた。増川君の妻のため、増川君の努力が、却つて妻を失ふ努力と今はなつた。」「順子の虚栄の籠に投げ込んだものは、夫、三人の子、金……彼女につながるあらゆるものである。」という非難が、のちの順子像の原型になつてゐることはいうまでもない。夫と子供を捨てた家庭の破壊者、貞操感の欠如した「淫婦」、男を滅ぼすような贅沢好き、貧弱な才能を勘違いした傲慢な女、男の権力をかさに虚栄を満足させる愚かな女という悪罵に終生順子はさらされるが、この地方紙にあらわれた最初の順子批判は、男たちの本音をもきちんと表出してゐる。「増川君のためにも子供のためにも、今の細君の方がどん

なに仕合せか知らない。小説なんか書けなくなつて愛の比重が上下する訳ぢやない。」と、離婚後に子供たちを養育しているナツノを持ち上げるわかりやすさは、順子に代表される女性像がいかに男性の恐怖を誘引するかを例証している。いわば順子は「新しい女」の踏襲者であると同時に「モダンガール」の先駆けとして、男性権益を脅かすネガティブな偶像となつたのである。ただ、順子自身に即していえば、彼女は「新しい女」のフェミニズム思想に根ざした意思的行動力も、「モダンガール」の軽やかな価値破壊の先端の実践力も持つていなかった。彼女を突き動かすのは、「芸術」に殉じようと決意する不可解な本能とも呼ぶべき激しい情動であつた。

順子の無手勝流の実践が端的に表れたのは、竹久夢二との恋愛、同棲である。夢二とは本の装丁を通じて知り合つたが、女学校卒業後に美術学校への進学を望んだほど美術に関心のあつた順子にとつて、夢二は憧れの芸術家であつた。夢二の自伝的小説「出帆」(『都新聞』一九二七・五〇九)に順子をモデルとする今田甚子(三越製の奥さん)と称されている)が、当時同棲していたお花(モデルはお葉)の思惑など無視して、突然に來訪する箇所があるが、三太郎(夢二)は「変な女」と思ったとかなり残酷に甚子を切り捨ててゐる。順子への嫌悪を描いた「出帆」と、順子が二人の経緯を書いた「オレンジエード」(『週刊朝日』特別号一九二六・一〇・一)、その小品を取めてのちに夢二とのことを回想した「欲望と愛情の書」(紫書房、一九三四)などからこの恋愛の

経緯をたどってみよう。

『欲望と愛情の書』には夢二の書簡が引用されている。勿論その手紙の真贋については疑って見る必要があるが、写真版で示されている一通もあり、ひとまずその叙述に従うと以下のようになる。

一九二五年（大正一四）四月一七日付けで夢二は順子の著書装丁御礼の手紙への返事を書いた。それは新聞の写真で見た順子が「想像したやうな人」であったとあり、翌日付けでまた手紙が来た。順子があらかじめ知らせていた上京の知らせに「誰にも逢はずにまっすぐに、私に逢つて下さい」（五月一三日付け）と夢二が返信し、順子は弟良輔を伴つて新築したばかりの都下松沢村・少年山荘を訪問する。これが発端となつて恋愛が生じた。順子は描いているが、すぐに二人は結婚を約し、家族に挨拶すべく本荘に行くことを順子は夢二に頼んだ。しかし、「出帆」では夢二が本荘を訪ねた経緯を、突然甚子がお花留守中の三太郎を訪ね、本屋（足立）との間が採めているので急遽帰郷するが同道してくれと頼まれ汽車に乗つてしまい、その車中で結婚を甚子から切り出され、母のためという彼女に懇願され婚約者として古雪に降り立つたのである。この概要を記すだけでも、その不自然さは目立つが、ここで気づくのは甚子が東京には居らず本荘に帰省しているとしている点である。つまり、文通だけでお互いの意思をかわせたと二人は初めて会った瞬間に婚約し、その足で順子の実家に報告に行つたということになる。

否定の前の肯定・山田順子と秋声

この年、四月一五、六日の『秋田魁新聞』に順子は「この頃のこと」というエッセーを発表しているが、ここで「雪解けの母居ます地を慕うて私は帰つて来た」とあるから三月末か四月初めには帰省していたと思われる。同紙四月一三日付けには「流る、ま、に」の／順子さん／夫と子供を捨て、／小説を出す迄……／自由か？虚栄か？の記事が掲載され、彼女の経歴が詳細に紹介された。日には定かではないが五月に夢二は順子とともに本荘を訪ね、順子の家族から歓待されている。この後、横手、湯沢を回つて二人は帰京した。この旅の印象を夢二は「出帆」の中でこう記している。「本荘の家で見た最悪のものは甚子の身だしなみだつた。肌に近い着物はどれ一つとして女の周期的の汚点のついてゐないものはなかつた」。順子に対する身体的な侮蔑と嫌悪があからさまに表明されたこの箇所は、以後順子を評する場合に必ずと言っていいほど、引用されてきた。美しく装われた外面と、病んで退廃した不潔な内部という順子の表象化は、単純な悪意の所産に留まらない順子という存在への攻撃的ともいえる男性の忌避感を描出してやまない。

帰郷後すぐの六月、夢二の属している春草会から「順子とは別れ、お葉を呼びもどせ」という署名簿が出され（青江舜二郎『竹久夢二』、東京美術、一九七二）、二人の関係は世間から非難を浴びる。夢二の子供らとの折り合いも悪く、また人気が下り坂であった夢二の収入が思わしく無く順子は母からもつた金を使い果たしていた。この同棲期間は『欲望と愛情の書』によれば、七月

二三日に順子は本荘に戻っているの僅か二か月余りのことになる。この別れは地方ジャーナリズムの格好の関心となつた。一〇月六日、一日、一五日と『鳥海新報』は「或る日の会話」という順子へのインタビュー記事を掲載しているが、一日の記事で夢二からお葉を奪つたのではないかという記者の問いに「きまりが付いてゐた」と応えている。まさしく順子は夢二の聖なる守護神であるお葉を破壊した敵として悪評の女となつていた。本荘はその時、翌一月一七日から催される「種苗交換会」で沸き立っており、順子は家を訪れる来客の接待で忙しかつていた。翌年の三月一日から一三日まで『秋田魁新聞』に連載された小嶋彼誰の「順子と村田光烈」によるとこの頃に順子がかねて和歌を通じて知り合い文通していた横手市の素封家で県会議員の村田と知り合いを介して料亭「亀清」で出会つたらしい。村田は「仮装人物」で秋本として登場することになる。

一二月一日から四日まで『秋田魁新聞』に発表された「皮相なる人物評とジャーナリズムについて」で順子は、「單純に思想一片からのみで別れたでもないのに、夫も子も捨てた、虚栄の女、浮気な女と全国にわたつて流布してくれた人々の、それだけの氣持、動機立場を静かにかへりみて考へると私心を抜きにして、ましい立場や心からものをいひ得る人の少いの、つくぐ世の中が浅ましくわびしくなつてくる。」とイエロージャーナリズムの暴力を嘆じている。もはや順子は「あれは私のことぢやない。山田順子といふ別の人の事なんだよ」と思うしか道はなかつた。だ

が、村田との交渉が生じていた状況において順子は自己防衛していく必要があつた。村田には妻があり、また妻妾同居しているという噂もある人物であり、また一層のスキヤンダルが加熱する危惧があつた。

だが、そのような懸念など必要ないステージへ歩を進めることになるのは、順子自身考えもしなかつたであろう。鬱々とした日々を送る順子のもとに秋声夫人はまの急逝の報がもたらされたのは一九二六年正月早々のことであつた。二日に脳溢血で僅か四六歳の若さではまは六人の子供を残して逝つた。残された秋声は五六歳である。二六歳となつた順子は弔問のために上京した。そのまま秋声宅に近い大野屋旅館に滞在し、秋声と子どもたちの世話をしたいと秋声宅を頻繁に訪問した。二月四日にはまの命日にちなんで発足した懇談会「二日会」にも順子は出席した。二〇日に下谷・臨江寺でいとなまれた四十九日法要に現れた順子の姿は本論のはじめに紹介した吉屋信子、川崎長太郎に活写されている。それはまるで主演女優の登場のように劇的で鮮やかである。だが、その優美な誘惑を湛えた身体は語る欲望にさいなまれながら、その出口を求めてもだえ苦しんでいた。順子が「芸術」を語るといふことは、何よりその生を持続させるための必須の行爲であつたのだ。ここで出会つたのは初老にさしかかつた大作家と、浮薄な芸術志願の若い美女などではない。共に「生」の意味を模索する巡礼者なのだ。ただ、二人は違つた遍路道を行んだに過ぎない。だが、その違いはそのままに近代が構築した男女性差によ

る言語、生活、表現、語り、身体、身ぶり（パフォーマティヴィティ）、性（セクシュアリティ）の深い溝を照らし出していくことになる。

順子が「仮装人物」のモデルとしてだけ文学史に残されたことは、単純に順子に残すべき作品を書く才能がなかったからだけではない。その「才能」と呼ぶものがこの「深い溝」の分断のなかで生成されているのであり、そのことを学習する必然を女性作家は常に要求された。が、順子は学ばなかった。いや、学べなかった。彼女の中に勃然と生起する語る欲望は、気恥ずかしくなるような詠嘆や怨嗟、情緒を銜いもなく噴出させる。順子の表現への固執的な強靱さは読むものをたじろがせる。そして眼を背けさせる。

秋声の語りの枢軸に取り込むことによってしか順子のもものを読まないリタラシー、言い換えれば順子テキストを廃棄しようとするリタラシーは、一方に順子によって代表される女性類型を生き延ばし、大いなる興味をかき立て持続させていった。素材として対象化された順子は文学史の中で確実に生息し続けている。そして、順子が絶叫して哀訴する声を、より秩序や理非、脈絡に適合したヒロインとなって代弁する。しかし、順子の真の叫びはかき消され永遠に届くことはない。秋声の「順子もの」や「仮装人物」以前の順子の著作を読む作業とは、そのかき消された言葉を探索し、近代女性文学が宿命として抱えた「語る欲望」の制限・禁止を再考していくことなのだ。

否定の前の肯定・山田順子と秋声

（この項続く）

付記 本稿は拙稿「秋声の女―山田順子考」（同志社女子大学短期大学部日本語日本文学演習ゼミ編『「仮装人物」を斬る』所収、一九九二年）をもとに、大幅な改稿を施したものである。秋声との交渉と作品の相関については続稿で述べる予定であるが、本論末に順子の単行本解題、および著作目録稿を参考のために付す。その発表年月日は対象著作のなかでの表記に従って西暦年ではなく、元号を用いた。なお、順子のまとまった評伝としては筆者未詳「山田順子」（直木三十五編『変態恋愛実話』明治大正実話全集第一二巻所収、平凡社、一九二九）、中村秀子「山田順子」（円地文子監修『名作を彩るモデルたち』近代日本の女性史第一〇巻所収、集英社、一九八一）があり、参照した。

注

(1) 一九二七年（昭和二）四月二四日付『東京朝日新聞』記事より

(2) 「知友名簿にない彼女」（『婦人画報』一九二七・七）

(3) 「流転五人女」（『婦人公論』一九二七・八）

(4) 「徳田秋声論」（『文芸』一九三四・三）

(5) この出生月日、および生誕地ついて、野口富士男氏は『徳田秋声伝』（筑摩書房、一九六五）のなかで本荘市役所に問い合わせた結果、「明治三五年六月貳拾五日 秋田

県本莊市古雪町三十三番地」という回答を得たことから

これに確定されている。その後の順子関係書、論稿もほぼこれを踏襲している。しかし秋田県立高等女学校（現秋田県立秋田北高等学校）にて閲覧した学籍簿には出生年月日が六月二日、本籍地ならびに住所が古雪町五二番地となっていたため、念の爲本莊市役所を訪ね問い合わせると、誕生は二二日、届け出が二五日、また本籍・住所番地は五二番地であることが判明した。順子の生家は回禮問屋として表通りに面した店先から裏は荷下ろしのため子吉川に接していたため、番地の異同が生じたものと思われる。また本莊市に市制がしかれたのは昭和二九年で、それまでは由利郡本莊町であった。

(6) (無署名) 「歴史を語る古雪界限 本莊の源流をたずねて」〔野〕第一五号・一九八〇・六 参照

(7) 中村秀子「山田順子」〔円地文字監修〕名作を彩るモデルたち」近代日本の女性史第一〇巻所収、集英社、一九八二

(8) 一般的には「水は流るる」が出版時に改題されて「流るるまゝに」となったとされてきたが、ここに順子自身が『愛と受苦』後書きに記すように身体から溢れ出る情動を表す「水は溢るる」の方が作品には合致しているように思える。本論ではこの題名を順子の初著作のもとタイトルとしたい。既に松本徹「徳田秋声年譜」〔徳田秋

声全集』別巻、八木書店、二〇〇六）にその指摘がある。

附資料

山田順子著作目録稿

- 1 「流るるまゝに」(発行所) 聚芳閣 (発行年月日) 大正一四年三月二〇日、四六判、三〇二ページ。定価二円。発行者は足立欽一。序文として徳田秋声「流るるまゝに」に序す、久米正雄「序」、土岐善磨「序」一種の紹介状として、「菊池寛「序文」、山田順子「自序」があり、足立欽一の「跋」が巻末に付されている。装丁は竹久夢二。

内容は順子の結婚生活を題材に、幼少時から芸術に憧れ続けた主人公濛子が結婚から夫の破産、夫婦の相克を経て、小説家としての自立を目指す様子が描かれている。『苦惱を招くもの』(発行所) 上方屋書店(発行年月日) 昭和九年六月二二日、四六判、本文二五三ページ、付録四二ページ。定価不明。限定版として出版された。

『神の火を盗んだ女』の著者跋にこれも自費出版した旨が記されている。扉に娘淑子との写真が貼られ脇に「かくて今日も風の流れにわれ立てりいるれを指して歩み出つへき 順子」という歌が添えられている。

内容は日々の雑感、当時の愛人にあてた書簡、回想などが渾然となってまとまりはないが、幼児期のこと、結

婚の経緯、秋聲との離別後の交渉など、参考になる点が多い。巻末に付録として「ミノ子に連なる風景」と題した小説が配されているが、淑子らしき子供ミノ子に語りかけかける形で当時の生活を描いている。また「えい」の「跋」が付されている。

3

『神の火を盗んだ女』（発行所）紫書房（発行年月日）昭和二年十二月二十五日、菊判、本文二六六ページ、跋一一ページ、予約定価二円。

発行者は山田順子、発行所と同じ大森区馬込町東二ノ一一七〇となつてゐることから当時順子がここに在住して自費出版したことが察せられる。扉に順子像と思われ小田次雄による単彩の絵があり、上方に「順子甦る」の文字がみえる。跋によると春に「戯歎」を三益社から出版予定であつたが、急ぎ繰り上げてこれを完成させた。とある。自序には一月二四日から二月一〇日いつぱいで書き直しく書きあげたことが記されている。

内容は前著と同様に一貫したテーマは無く、家出をして去つてしまつた娘に語りかける形で自分の現在、過去を告白しつつ進行する。話題は前後して複雑な構成をとつてゐるが、娘に自分を理解させようと飽くまで率直に自分の多くの恋愛を語つてゐる。

4

『欲望と愛情の書』（発行所）紫書房（発行年月日）昭和一年五月八日、四六判、一七六ページ。定価二円二

○銭。

発行者は山田淑子、発行所は東京市芝区新橋七ノ十二。おそらく順子が経営していたバーの住所と思われる。表紙は竹久夢二のセノオ楽譜挿画から転写したと思われる絵が使われている。中扉前に順子の近影が掲げられ、目次前のペラには赤字で「竹久夢二の霊に供へて／女このろの謎をひもどけば 著者」の辞がある。次ページには順子宛の夢二書簡が写真版で掲載され、それにも順子の「夢二のよそへて」という文が添えられている。

内容は夢二の手紙を交えた回想記であるが、ここでも順子は構成に顧慮することなく、全く自由に独自の人生観を織り混ぜながら二人の恋愛と別れを描いている。巻末には大正一五年一〇月一日「週刊朝日」別冊特別号に発表した、夢二との交渉を題材にした小説「オレンジエート」を秋声の「推薦の辞」（原題「山田順子「オレンジエート」推薦の弁」）「週刊朝日」大正一五・一〇・一」とともに再録している。

5

『愛と受苦』（発行所）紫書房（発行年月日）昭和一年二月一日、四六判、三六九ページ。定価四円八〇銭。五百部限定。

発行者は東京市板橋区中新井三ノ一八七八常盤荘内の藤代美也。著者、発行所ともに同じ住所である。また印刷所は大阪市北区梅ヶ枝九六の弘文舎印刷所となつてい

る。これも自費出版と思われるが、藤代美也という人物については調査が未だついていない。表紙、中扉装丁は影山倭子、また目次前に順子の写真が挿まれている。

内容は後に『女弟子』で語られる秋声との交渉が中心となつている。秋声研究の上にも重要な指摘が多い。娘に語りかける形式が引き続き用いられているが、一方キリスト教への接触が見られ娘に去られた後の自己救済の方途を探っている点がこの書の特徴となつている。「蹴！折りと感謝のなかに！」には「光と残光の中に！」、「白位を慕ふて」の二著が完成していたが、友人宅に身を寄せている間に盗まれてしまったとある。

- 6 『私たちの観音さま』（発行所）ゆき書房（発行年月日）昭和二五年三月五日、四六版、一〇七頁、定価二二〇円。発行者は山田ユキ、発行所住所は鎌倉市長谷一、観音文化運営会。「巻頭の辞」として長谷寺第百二十九世善譽の名があり、観音教の普及を目的としたもの。順子は「信仰の奇蹟」、「女性と仏教」を書いているが、作詞した「観音音頭」「観音小唄」の歌詞も掲載されている。

- 7 『女弟子』（発行所）ゆき書房（発行年月日）昭和二九年六月三〇日、四六判、二九〇ページ、定価三五〇円。発行者は山田ユキ、発行所住所は鎌倉市長谷一番地仁尾邸内となつている。ただし筆者の所蔵本には仁尾邸内に棒線がひかれスタンプで東京中央郵便局私書函第二六

九号が横に付されている。「読売新聞」一九五四年（昭和二五）六月一〇日付で「山田順子さん結婚／新夫はタバコ研究の仁尾博士」の記事がみられるが、仁尾正義との関係を解消したあとの順子の処置であろうか。挿画・装丁は山本敬輔、編集大谷進の名がある。

内容は「中央公論」文芸特集第六号（昭和二六・一）に発表した「秋声と女弟子」に手を入れた「肉体の悪魔」を中心に秋声との回想を書きたして一冊にしている。小説仕立てのところで、実名による回想が渾然となり、また年代も前後して、順子一流の構成となつている。

- 8 『女弟子—わが肉体と心情の遍歴—』（発行所）あまとりあ社（発行年月日）昭和三〇年七月二〇日、新書版、二二三ページ、定価二二〇円。文化人の性風俗誌と銘打たれていたカストリ雑誌「あまとりあ」の発行元から出版された。あまとりあ側も、實際的読物と評判になつたことを踏まえて新書化の依頼をしたと思われる。

内容は「肉体の悪魔」「ザボンの夜」を『女弟子』から再録、これに文壇人交遊録の「青春夜話」、艶笑小話「順子漫筆」、自伝的回想「別れも愉し」など書き下ろしを加えた構成となつている。

- 9 『七才の傾斜—その性の記録と行動から—』（発行所）久保書店（発行年月日）昭和三六年四月二〇日、新書版、

二六八ページ。定価一五〇円。

あまとりあ社の後身である久保書店から出版された小説集『あまとりあ』は昭和三〇年八月に廃刊。ティーン

エージャーの性を描いた創作「十七才の傾斜」と「お嬢さんは魔女志願」の二編からなる。

(雑誌・新聞)

「この頃のこと」

「この頃のこと」

「菊池寛氏の

「皮相なる人物評とジャーナリズムについて (一)」

「皮相なる人物評とジャーナリズムについて (二)」

「皮相なる人物評とジャーナリズムについて (三)」

「皮相なる人物評とジャーナリズムについて (四)」

「文芸と家庭婦人について (一)」

「文芸と家庭婦人について (二)」

(「はがき評論」)

「岡田初代さんの印象」

「夢と現実 衷心の叫び」

「白ばら赤ばら」

「オレンジエート」(*小説)

「強きは母の愛」

(「はがき評論」)

『秋田魁新聞』

『秋田魁新聞』

『文壇日本』

『秋田魁新聞』

『秋田魁新聞』

『秋田魁新聞』

『秋田魁新聞』

『由利新聞』

『由利新聞』

『不同調』

『女性』

『不同調』

『女性』

『週刊朝日』特別号

『女性』

『不同調』

大正 一四・四・一五

一四・四・一六

一四・七

一四・一・二・一

一四・一・二・二

一四・一・二・三

一四・一・二・四

一五・一・一

一五・一・五

一五・五

一五・七

一五・八

一五・九

一五・一〇・一

一五・一〇

一五・一一

「酷かりし愛情」

「秋声と女弟子」

「仮装人物のわたし」

「仮装人物の葉子といわれて」

「婦人画報」

「中央公論」文芸特集号

「人間探求」

「婦人朝日」

六・五

二六・一

二七・一〇

三三・一一

(なががわ・しげみ 本学教授)

否定の前の肯定・山田順子と秋声